



アブチロン

122、124、131、133 編は端書きに **都に上る歌**。ダビデの詩とあります。15 編の **都に上る歌** の中に **ダビデの詩** が 4 編あることとなります。巡礼者を迎え入れる側に立った **ダビデの詩** と、読み取ることができます。

122 編は **ダビデ** が喜びにあふれて巡礼者を迎え入れ、**主の家に行こう、と人々が言ったとき／わたしはうれしかった。**(1) と率直に歌い出しています。そして、まず第一に、巡礼地である都エルサレムは **主の家** であると歌っています。そこで **すべては結び合い(3) 主の御名に感謝をささげる(4)** と、民の絆と民のなすべき業を確認しているのです。

第二に **裁きの王座が／ダビデの家の王座が据えられている。**(5) と、都エルサレムには王座があり、王は正義と公正を司る者であることを明確にしています。そして、何度も繰り返し「あなたのうちに平和があるように。」(8) **わたしは願おう／わたしたちの神、主の家のために。**「あなたに幸いがあるように。」(9) と、民の平和、平安、幸いを求めています。

124 編は **主がわたしたちの味方でなかったなら(1,2)** と二度も繰り返して賛美し、主が民の味方となられたと感謝の叫びをあげています。**逆らう者(2) 敵意の炎(3) 大水(4) 激流(4) 敵の餌食(6) 仕掛けられた網(7)** に呑み込まれず、押し流されず、逃れ出ることができたと、神の助けを賛美しています。王は覇者として力を誇示するのではなく、王が神にひれ伏し、あらゆる艱難辛苦に対する勝利は **わたしたちの助けは／天地を造られた主の御名にある。**(8) と、救いと助けは御名の力によると告白しています。

131 編は **主よ、わたしの心は驕っていません。わたしの目は高くを見ていません。大き過ぎることを／わたしの及ばぬ驚くべきことを、追い求めません。**(1) と、王の力を誇らず、驕らず、身の程をわきまえる謙遜な思いを吐露しています。次に **わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように／母の胸にいる幼子のようにします。**(2) と **魂を沈黙させ** 神の声を求める信仰に立つと同時に、**母の胸にいる幼子** のようにと、愛と信頼の関係で主の前に立つと告白し、**イスラエルよ、主を待ち望め。今も、そしてとこしえに。**(3) と、民もその賛美を捧げるようにと歌っています。

133 編は 巡礼者を迎えて、王宮の者、神殿の祭司、詠唱者、すべての民が共に礼拝する喜びを、ほとばしらせて歌っています。**見よ、兄弟が共に座っている。なんと恵み、なんと喜び。**(1) 神の祝福が香油となって一人一人に与えられる様子を **かぐわしい油が頭に注がれ、ひげに滴り／衣の襟に垂れるアロンのひげに滴り(2) ヘルモンにおく露のように／シオンの山々に滴り落ちる。**(3) と、賛美しています。エルサレムへの巡礼と礼拝によって、**シオンで、主は布告された／祝福と、とこしえの命を。**(3) と民は祝福を受けます。

「讚美歌 21」では 124 編を 157「いざ語れ、主の民よ」でジュネーブ詩編歌を採用しています。https://www.youtube.com/watch?v=xIxT_0BH6Ao&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=124 133 編を 161「見よ、主の家族が」<https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2012-12-07> で、イスラエル民謡を取り入れて賛美しています。「讚美歌 21」では **ダビデの詩** の 4 編から、10 曲の讚美歌をあげています。